
アナザー

No

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー

【Nコード】

N0614I

【作者名】

NO

【あらすじ】

『オレは世界の柱だ。だから：オレは殺されない』そう語る世界の柱と呼ばれる男。世界の中心を保つ存在で、世界の守護神。そして、世界を守るには…この男が死なないことだった！

1 神の柱

—遠い過去—

「ぐちゃり」

今日で三匹だ。取り敢えず殺した。

「いつまで続けるつもりだ」

闇から声が聞こえた。

「いつ？満たされるまでかな」

オレは答えた。

「見つかったらどうする」

やつは聞いた。

「そんな訳ないじゃん。オレが死んだ時点でこの世界は壊れるんだぜ」

溜め息が聞こえた…

2 理解

―朝―

オレは起きた。しかし、まだ眠い。もう一眠りするか。だが：

「起きて！」

その言葉と同時に激しく蹴られた、というより踏みつけられた。どうやら凧が起こしにきたみたいだ：もうダメか。いや、まだいる！

「朝食がさめちゃうよ！」

凧はまだ叫んだ。頼む、お願いだから寝かせてくれ！

そんなこんなで仕方なく起きたオレは、着替えて、飯を食べた。

「おいしい？」

凧はオレの顔見ながら聞いた。

「普通」

「美味しくない？」

その声をきいて凧を見ると泣きそうだ。しかしながら、オレは悪いことはしていない。取り敢えず誤魔化す。

「いや、そんなことは。う、うん美味しい。」

「本当に？嘘言ってない？」

「ああ。」

それを聞くと、凜は笑顔になった。その後しばらくして、凜は玄関に行った。もう出かけるらしい。

「じゃあ、私、学校いくね。今日、夜の予定は？」

「仕事だ。」

「そっか…わかった。ムリしないでね。」

行ってきます、そう行って凜は家をでた。

―夜―

深夜、オレは外へ出た。5人も殺ったし、今日は帰るつもりだった。

その時、隣に月に照らされる人影があった。それは空を見ていた。どうやら男の子みたいだ。

不意に空を見るのをやめて、オレを見た。その様子から察するにどうやら、そいつはオレに用があるようだ。

「貴方ですよ？柱なのは？」

突然の唐突な質問。正直驚いたが、何故かワクワクした。こいつどこかであったやつか？

「いきなりだな。そうだよ。」

それを聞いてやつは笑った。オレが誰か知って笑えるやつはそういない。大概のやつは怯え、恐怖する。

「お前は誰だ？」

「そうだ。自己紹介がまだだったね。僕は空。君は？」

「N.O.（ナンバー）って呼ばれてる。お前は何だ？」

やつはそれだけ聞くとオレの質問を無視し、踵を返した。そして、去り際に言った。

「教えてくれてありがと。じゃね、また会おう。」

やつは、そのまま闇に消えた…。ほんの数秒で姿は見えなくなった。

オレは止めなかった。また、止めようとも思わなかった。何故かわからない…。が、久しぶりに本能が騒いだ。

オレの手にはN.O.という文字が血で書かれていた。時々、無意識で書くこれがオレの中にある本心を描き出した。

…全部喰ラッテヤル…

オレも闇に消えることにした。

3 闇

―夜の続き―

暗い倉庫にオレはいた。オレは声を少し大きくしてやつを呼んだ。

「よお、イカれ道化師。いるんだろ、出てこい！」

そうオレが言った瞬間、声が聞こえた。そして、出てきたのはマスクというか仮面というかわからないものを被った男。

「いるけどな、NO。失礼や。人は名前で呼びなや。」

えっと、確かこいつの名前は……何だっけ！？やつのマスクのインパクトが強すぎてどうも思い出せない。

うん、取り敢えず流そう。

「まあ、それは脇に置いといて、実はき」

「よくないわ！」

ちっ、流せなかったか。めんどくさいやつだ。

「そんなことはどうでもよくて、実はだな、ききた」

「ええ訳ないやろー！」

いつの間にかコントになっている。取り敢えず思い出せ、オレ！
その時ようやく思い出した、そうだ！ジョーカーだ！！

「えっと、ジョーカー！？」

「なんや、わかつとるやないか。まあ、名前も思い出したことやし、
話聞こか。」

ようやくオレは、真面目な顔をして、ジョーカーに尋ねられた。

「空ってやつのこと何か知らないか？」

すると、情報屋であるジョーカーは聞いたオレの顔を見て、さっきまでの笑いを消した。

「柱の鎖がどうしたんや？」

「柱の鎖？やつが？」

「なんや、知らなかったのか。まあ、そやろな。オレもそれ以外知らんしな。」

「お前が把握出来ていない！？」

正直、驚いた。コイツの情報網から逃れられる人間は世界でそういない。

「そや。アイツは私の『眼』を逃れている。正直、我自身も驚いてる。」

「まあ、取り敢えずやつが『柱の鎖』だということがわかっただけ

でもよしとしよう。ありがとな、ジョーカー。」

そう言って、オレが背を向けて去ろうとしたら、後ろから質問が飛んできた。

「まだ、やっとなのか？ あれを。」

「ああ。」

「止めといたほうがええで。また、あんなのになったら取り返しがつかん」

そう、オレもわかっている。だが、しなければならぬ。

「義務だからな。」

そして、それがオレがオレである所以であり、オレの役目だからな
…

4 番外編―登場人物

N o. (ナンバー)

黒髪、黒目の『世界の柱』と呼ばれる男。

年齢は17歳としているが、何年も前から容姿が変化していないらしい。

暗闇を好むが、明かりが嫌いな訳ではない。

現在は凜とアパートで暮らしている。

さりげなく甘党である。

空^{そら}

『柱の鎖』と呼ばれる。

見た目は身長155cmぐらいのやせ形の少年。

不明なことが多い。

凜^{りん}

現在、大学に通う女子大学生。

髪はブラウンでストレートで、身長は約170cmでスタイルがいい。

明るいが、すぐにいじけるところがある。

何故か不明だが、N o. を弟として暮らしている。

辛党なため、N o. との好みによる争いが絶えない。

料理、バスケットが得意で、さりげなくメタラー。

ジョーカー

情報屋で、白い道化師の仮面（マスク！？）を被った男。

毎回、なぜか背丈や声が変わる。

気まぐれかつ、いろいろな方言と大阪弁が混じっている。

情報屋の他に麻薬や銃の密売をやっているらしい（殺しはやらないが…）。

等価交換が心情であり、普段はおどけた性格だが、目的のためには犠牲をいとわない。

世界の柱

古い神話に存在すると言われる柱。意思を持つと言われ、常にこの世に干渉しているらしい。

別名『世界の秩序』『破壊の闇』『再生の光』など多くの呼び名で呼ばれる。

柱の鎖

神が柱の暴走を沈める為に作ったとされる神話上の意思を持つ鎖。別名『神殺し』『冥界の扉』

グリアス

世界の柱を作ったとされる神。
自分の欲望を叶える為に生きたとされる始まりの神

ハラス

柱の鎖を作ったとされている終焉の神。
グリアスと対をなす存在でありながら、人間と呼ばれた神。
実際に人間であったかは不明。

血時雨

No. の愛刀。

刀身は赤黒く、禍々しい感じで溢れている。
大きさはサバイバルナイフと同じぐらいである。

5 神話

—翌朝—

オレはやつをさがしだすことを決めた。

それに気になることがある、それはやつの別名『柱の鎖』

そもそも、柱の鎖とは、神話上のオレと対をなす存在だ

それは、始まりの神グリアスの武器である『オレ』に対する終焉の神ハラスの対抗策だとされている。

グリアスの武器の『オレ』は、神でも壊せない。

何故なら、グリアスの力を全て利用して作られた『オレ』は、その名の通りの存在だ。

柱の破壊は破壊した者を含めた世界の破壊につながる。

よって、消せないとされた。

その為、その時ハラスがとった策が封印である。

ハラスの力を込めた存在は柱の鎖と呼ばれた。

その後、それを使い、『オレ』は一度鎖に封印された。

だが、オレは力を残していた。

それを利用し、ある条件のもとに鎖を破壊し、蘇った。

そしてその結果、世界の力を無理矢理ねじ曲げた。

その時、鎖は碎けて無くなったはずなのだが：

『まあいい。今度もオレが壊すだけだ。』

こんなことを考えているうちに目的地にたどり着いた。

まず、仲間を呼ばないとな

そこにあるのはどこにでもある高層マンション。

目当ての扉を見つけ、ドアを開ける

『おい、N O. だ。力を貸せ。』

すると、ドアが開き、声がした。

『あがってください』

オレは靴を脱ぎ、部屋に入った。

『それで、まず話を聞かせて下さいな』

オレはこれまでのことを説明した。

少しやつは考えているようだった。

『いいでしょう。私は貴方についていくと誓った身ですし。それでこの後は？』

『まず、あの殲滅少女に会いに行く。そして、連れ戻す』

『そうですか…では、行きましようか、御主人様』

ドアを出ながら、オレは返事をした。

『いつまでそうよぶ気だ、ツヴァイ』

5 神話（後書き）

ツヴァイ…赤目で黒髪。線の細い男だが…

6 殲滅少女

―夜―

気が付けば夜になっていた。

今、オレたちは刑務所の前にたっている。

『いくか、ツヴァイ』

すると、ツヴァイは頭を下げ

『イエス、マイロード』

とうやうやしく言った。

…もうその呼び方はやめろと言ったはずのに

オレたちは刑務所に入った。オレは血時雨を取り出した。

『暗殺は得意分野だ、手を出すなよ』

とツヴァイに向かって言った瞬間、闇に消えた。

しばらくして、オレは戻ってきた。

片手には真っ赤な血時雨、だがこの刀は濡れていない。
そうまるで、血を吸っているかのように…

『相変わらずその刀は不気味ですね』

シーンとした空気の中でツヴァイの声が妙に響いた。

『まあ、妖刀だからな。』それより…

『行くぞ!!』

元々隠密行動が得意なオレたちは、カメラの死角を難なく見破った。

そして、しばらくして目的の場所についた。

その監獄の中にいたのは、金髪のか弱げな少女だった。

彼女はこっちを見ていた…

『何のよう?』

オレは答えた。

『忘れたのか、N O. だ。ついてこい、また面白いものを見せてやる』

少女は笑いながら

『忘れないよ。変わらないね、N O.。いいよ、また、地の果てまでついていってあげる』

それで…と彼女は続けた。

『私の玩具おもちゃ持ってきた？』

オレはバックパックを投げた。彼女はそれを嬉しそうに受け取った。

『じゃ、出ようか』

『ここからが問題ですね』

『だな』

『なんで？』

ツヴァイが説明する。

『貴女 능력は殲滅用です。はっきり言って、隠密には適しません。今、ここで貴女と逃げれば証拠の映像が確実に残るでしょう』

『そう。じゃあ、ここを壊せばいいんだよ』

彼女はバックパックをあさりはじめた。

はっきり言って、かなり嫌な予感が、すっ

『うわっっ』

ドーンと音がして壁がはぜて、激しく燃え出した。気が付けば、オレたちがいた監獄が跡形も無く燃えている。

『これで証拠も残らないし、大丈夫だね♪』

オレは呆れつつ

『後何分ここは持つんだ？』

すると、サラッと

『2分ジャストだよ』

なんか予想通りだったが、実際になるとショックだ

『全力で走るぞ！』

そして、ダッシュでどうにか脱出した。

誰にも見つからず、かなり遠くの路地に来ると、彼女はスイッチを取り出した。

また、嫌な予感が

『それはなんだ？』

取り敢えず、尋ねてみる。

『小型爆弾のスイッチ♪』

そう言った瞬間、ボタンを押した。

：

……

ズドオォーン！！

とんでもない爆発音が聞こえた。

火柱が登った刑務所は一瞬で崩れ落ちた。

『小型ナトリウム爆弾、通常フルインパクトだよ』

…勘弁してくれ…

7 行動開始

―脱出から3日後―

『凜には連絡しといた。』

今はツヴァイの家にいる。

側には少女がすやすやと寝息をたてている。

『で、今後はどうするのですか？』

その時、ドアが開いた

『それなら調べといたで』

『…タイミングがいいですね』

ジョーカーは気にせず

『バルトロスや』

バルトロスか…確か自治国家だっけ、確か別名は…

『秘密の国に行くの？』

気がつけば少女は起きていた。

『でも、あそこは入れないよ』

『確かに：どうする気だ？』

―バルトロスは秘密主義国家と呼ばれ、主に軍事産業で発展している国だ。

すると、ジョーカーはニヤニヤしながら

『忘れたのかいな？我を誰だと思ってんのや』

その手にはカードが握られてた。

『切り札やで』
ジョーカー

―数日後―

オレたちはバルトロスについた。空港ではジョーカーのカードで何事も無く通れた。

：相変わらず訳のわからないやつだ

チェックの後、空港を出て、取り敢えず宿を探し始めた。

『さっきのカードといい、相変わらずスゴいですね、貴方。』

すると、ニヤニヤしながらジョーカーは得意げに

『そやろ。世界は我の下僕やからな。』

』
……オレが世界の柱だって、忘れてるな、こいつ…

—しばらく歩いた後—
『ここや』

急にジョーカーはボロいアパートを指差した。

『ここや』

『マジかよ…』

『まあ、ここは訳ありなもんが集う場所なんや。』

ツヴァイは考えながら

『成る程、木を隠すには森ですか…』

ジョーカーは笑って

『そゆことや。あんた、わかつとるやないか、それに…』

ジョーカーのマスクが不気味に照明に反射した…

『我の【神眼】もあるしな』

―アパートにて―

宿に入るとすぐにジョーカーが言った

『そういやN.O.、この前から聞こえ思っていたやけど…その娘のこと教えてな』

忘れてた…そうか、こいつらは初めましてだったな

『こいつはアリス。』

能力は…』

『【獄炎】だよ♪』

アリスは笑って答えた。

7 行動開始（後書き）

アリス：金髪で青い目をした少女。火薬が武器であり、『獄炎』と呼ばれる能力を有している。

能力紹介

N O. ↓神の血

ツヴァイ↓？

アリス↓獄炎

ジョーカー↓神眼

空↓鎖？

8 調査開始

―アパートにて―

荷物をおいたオレは

『ここから、どうするんだジョーカー』

すると、おどけた声が

『空について調べたら、ウロボロスという団体組さんに行き着いたんや』

ツヴァイが聞いた。

『その連中の素性は？』

ジョーカーは不気味な笑みを浮かべた。

『構成員は5人。そのなかに空もおる』

『わかった。』

5人か…少ないな

『話はまだやねん。奴等は我らと同類や』

そうじゃなくちゃな…面白い、最高に愉快だ

—15分後—

『準備はいいな、行くぞ!』

各自準備をしたオレたちは外に出た。

オレは血時雨を腰にさし、ツヴァイは背中に巨大なあいつ専用の兵器を、アリスは黒いバックパックを背負った。

その一方、ジョーカーは丸腰だ。やつの神眼は何もないほうが強い。

『街の南に繁華街がある。そこへ行くで』

アリスは首を傾げながら

『そこにいるの?』

『いや、見つけてもらうんや』

—南の繁華街—

『騒がしいな』

街は人に溢れているみたいだ。

そんなことを言うと

『そりゃ、そうや。なんせバルトロス最大の街やで。少ないほうが

おかしいんや』

アリスは屋台で出ていたサンドイッチを食べている。
次のを買おうとしてバックパックを背中からはずして財布を出そう
としていたすると、

突然見知らぬ男がそのバックパックを奪って疾走した。

『ひったくりか』

オレは冷静に言い、すつとジョーカーに目をやった。

『わかつとるがな』

その瞬間、ジョーカーのマスクから表情が消えて、辺りが一瞬冷えたと思うと：男が倒れていた。

オレはゆっくりと男からバックパックを取り返し、アリスに渡した。

アリスは笑いながら

『ありがとう』

『オレは何もしていない。』

すると、ジョーカーのほうを向いた

『ありがとう、ジョーカー』

ジョーカーは笑いながら

『朝飯前やさかい。次は氣いつけや。』

—No. の近く—

『神眼：奴らで間違いないな』

パーカーを羽織り、

全体的に細身な男が呟いた

—アパートにて—

オレたちは部屋で話し合った。

狭いが、意外に居心地のいいこの部屋は全員兼用だ。

『エサはまいたな。あとは食い付くかだ。』

『大丈夫だよ！それより…』

アリスは聞いた。

『凜姉来ないの？』

………はい？

『今回は来ない』

その時ドアが開いた。

『誰が来ないですって？』

…あれ、オレは夢を見ているのだろうか？

『って、何でいるんだ？』

これには凜ではなく、ジョーカーが答えた。

『よんどいたんや。姉さんの能力は絶対防御の力もあるしな。』

そこまで言って、ジョーカーはにやついた。

『No. の愛しの姉さんやろ』

…こいつを血時雨の生け贄にしてやろうか

『まっ、そゆことで。皆さんヨロシク！』

―アパートの個室（オレと凜）にて―

『なんでオレと相部屋なんだ？』

凜は荷物を両手に抱えて

『だって、まずジョーカーとツヴァイは一緒の部屋でしょ。アリスは獄炎があるから1人のほうが都合いいし、それに』

…それに？まだ、アルンデスカ凜サン？

『私のこと好きでしょ？』

オレの脳内では、一瞬理解出来なかった。

5秒たってから

『な訳あるか！姉弟だぞ！！』

『じゃあ、私のこと嫌い？』

オレは困った。

…否定出来ん…

さらに、凜は続ける

『私は好きだよ、N O.。それに姉弟名乗ってたのは仕方なくだよ』

沈黙が続いた

…どうすればいいんだ？

『今日は疲れたなあ。寝よか、N O.』

『つああ、そうだな。』

あれ…ベッドが1つしかない。

その上、床は土足な為、布団もしけない。それ以前に布団が1組だけ…

おれがどうしようか迷っていると

『一組しかないし：一緒に寝よ、N O.』

オレは一瞬で答えた。

『ムリだ!』

すると凜はうつむいた。今にも泣き出しそうだ。

『：私のこと嫌い?』

『そんなことはないけど：でも、……………ね』

『やっぱり私のこと嫌いなんだ：』

気がつくとな、泣いている!

オレはあわてて

『わかったから、泣くな。』

『うん』

：クソ、なんでオレはこいつの前だけこんなキャラなんだ

—アリスの部屋にて—

ガチャガチャ音が聞こえる。

部屋にはアリス1人だけ。

何だかんだで1人が好きらしい。

よく見ると、アリスの手には火薬が握られている。

彼女の能力は【獄炎】

具体的には、火を操れる。

その為、火薬類はいわゆる彼女の能力の補助である。

その時、アリスが嬉しそうな声を上げた。

『完成！名付けて、パニックフラッシュー！』

その手の中には小型爆弾が握られていた。

ーアパートの個室にてー^{ジョーカーとツヴァイ}

『あの2人仲良くやってんかいな？』

『さて、どうでしょうかね』

ニヤニヤしているジョーカー。

というのもわざわざNo. 達のベッドの1つを運び出したの他ならない彼だからだ。

一方、ツヴァイは武器を磨いている。

ー彼専用大剣『デストロイ』。サイズは3mで、素材は不明。また、重さは100キロという戦闘には使えないような武器である。

故に彼にしか使えない。

―とあるビルの頂上―

『…わかった。Thank youな。』

携帯電話を使用していた女はそう言っていた。

8 調査開始（後書き）

結論

凛はツンデレというよりNO. が大好きなだけらしい。

9 接近（前書き）

もうそろそろ話が動き出します

9 接近

—翌朝—

『眠い…』

正直、全く寝れなかった。

一方の凜サンはと言うと

『はぁ～よく寝た!』

……死んでくれ…

その瞬間、凜サンはこっちを振り返った。

『何よ? No.』

『いや、別に…』

ここで、やたらニヤニヤしているジョーカーが口を開いた。

『さて、今日は郊外の探索や。地形は知らんと不利やけんな。』

『具体的にどう動く?』

『そやな、なるべくはよう地形把握したいしな。2つにグループを分ける。』

『能力的に我、アリス、ツヴァイのグループとN.O.と凜ちゃんのグループやな。』

…昨日ベッドが1つだったのはこいつのせいだな

そう思っているとアリスが口を開いた。

『そうだね、私の能力はあんまりN.O.と相性よくないしね♪』

…オマエもグルか、というか、どんどんキャラが崩れてるな、オレ…

『ということでもいいですね、ご主人様』

うわ、ツヴァイまで裏切りかよ

『さて、行こうかいな。我らは東区行くから、N.O.達は西区な』

—西区にて—

凜は上機嫌だ、何故か知らないが…

『ぱっぱと回って帰るぞ!』

その瞬間に凜は顔をうつむいていた

…えっ、何かした、オレ？

『やっぱ私のこと嫌いなんだ…、あっちと違って姉弟という関係じゃないから楽しみにしてたのに…』

気のせいか、周りからは、冷やかな視線を痛いほど感じる

そう、まるでオレが泣かせたみたいに

『わかったから、終わったら街まわろうな』

すると、笑顔になり

『うん!』

ゴウウウウ

『?なんだ。』

その瞬間、周りからとは違う視線を感じた

咄嗟に隣を歩いていた凜に視線で告げる。凜も気づいたらしい。

その後、何もないかのようにオレ達は振る舞った。

―路地裏―

『いい加減出てこいよ』

すると、建物の上から女が出てきた

女は一見普通だが、目は殺気に満ちている

『ようやく察して、移動してくれたわあ、長かった』

オレが質問する前に凜が聞いた

『戦うつもり？』

『ええ…といたいけど、今回はパスね。バイバイ。』

その瞬間、女は走り出した。

追ったが、地の利はあっちにある。あっという間にまかれた。

『なんなんだ、あいつ』

オレの口からそんな言葉がこぼれた。

9 接近（後書き）

初めてまともな後書きを書きますね。

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。

つたない文章ですが、感想とか書いてくれると嬉しいです（；´
、）

ケドお手柔らかおねがいしますねΣ（。ロ。；

10 地獄からの炎（前書き）

戦闘シーンが微妙でしょうが、作者がこういうのになれていないんだ…と目を瞑って下さると幸いです（ゝДゝ）

10 地獄からの炎

―アパート―

『……ってことか、No.？』

『ああ、そうだ。捕まえてオレの力を使って吐かせようと思っていたんだが…』

オレ達はあの後急いで連絡をとった。

勿論、やつのことを相談する為に

その後、アパートに集まるとオレと凜は説明始めた

そして、今に至る

一通り話を聞いたツヴァイが口をやつと開いた

『何が目的なんでしょうか？自ら姿を見せながら、何もしないとは』

オレも思った

空の時といい、今一真意がつかみきれない。

『取り敢えず、警戒はしといた方がええな。各自部屋には対策を万全にしといてや。』

―個室（オレと凜）―

部屋の隅にはオレの血で書かれた記号がある

さっきオレが書いたやつだ

オレの力はオレの血があれば大概のものは発動可能だ

『なんなんだろうね?』

『わからない。しかし、警戒は怠らないようにしなきゃな』

…凜を守るためにも

そんなことを考えていると

『あー!』

凜の大声が聞こえた。何かあったのか、とオレは驚き振り返った

のだが

…アレ? 普通ここは敵じゃないのか?

そこには敵ではなく、何故か凹んだ凜がいた

『どうした?』

.....

少し間があったが、あった気がするが…

『忘れてた』

『何を?』

『No. とのデート…』

………

『えっ?』

どうやら凜は落ち込んでいるらしい。ところが急に立ち上がると

『もとを辿るとアイツのせいだ……殺す……あの女がいたから……
デート予定は台無しなん…』

どうやらオレと2人で街を回れなかったことが悔しいらしい

オレは声をかける気も起こらず、彼女がおさまるのを見ていた

―その夜―

ドオオーン

突然、激しい爆発音が聞こえた

『何?』

どうやら寝ていた凜も起きたらしい

その時、ジョーカーの声がドア越しに聞こえた

『No.！出るで！！』

オレはすぐに返事を返した

『わかった！』

―爆発場所―

立ち込める焦げ臭い匂いと次々と出てくる黒い煙、波打つ赤い炎
そんな炎が激しく燃えている中にやつはいた

『やっときたわねえ。待ちくたびれたわあ』

コイツ確か…

『昼間のヤツね、アナタ』

『そうよ。あ、挨拶まだだったわね、はじめましてえ私はカレン』
それにしても、この力は？

『この能力は私と同じ！？』

アリスは驚いた。

『あら、貴女？【獄炎】を持つのは？』

カレンと名乗る女は聞いた

『そうよ』

『そう。探してたの、アナタ。理由はいろいろあるんだけど…戦って下さる？』

『わかったわ』

アリスはバックパックをゆっくり地面に置いて走り出した。どうやら、これだけ周りが燃えていれば、補助の爆弾は不要らしい。そして、走ってくるアリスに迎え撃つカレンは数本のナイフを勢いよく投げつけた。

咄嗟にアリスは避けたが、

バン！

爆発音と共にナイフの向きが変わった

いや、刀身の至るところを爆発させて無理やり進路を変えさせた、
というべきか

その進路変更にあリスは少し反応が遅れた

避けきれず、ナイフが直撃する

刺さる、とまではいかなかったが、右肩を切りつけた

『っ痛』

カレンはその様子を見て、ニヤニヤしながら次の攻撃を放った
再び爆発音が響き、数本のナイフが飛んでくる

『危ない！』

見かねた凜が飛び出そうとするが、オレは片手で止めておいた。

『行くな、逆に迷惑だ』

そう、空気や場の状態を扱う彼女の能力は団体で戦うのに適さない

それは味方が邪魔になることが多いから

それに、アイツは…

『キレましたね』

そうツヴァイが言ったその先には…

赤い人のシルエット

地獄の番人のような真っ赤な存在はまさに…

『【獄炎】』

一方、化物と化したアリスを見たカレンは叫んだ

『何よ、それ？なんなのよおお！！』

彼女は持っていたナイフを全て投げた

しかし…

ジュッ

キレたアリスに当たる前に熱で溶けてしまう

再びアリスは走り出した

今度は邪魔を全て燃やし尽くして…

そして、

その時、地獄の番人は笑いながら一言こういった。

『バーン』

そうまるで、幼稚園児がしゃべったような感じで…

そして、その言葉に反応して、一瞬で周りの火の杭が何本も罪人の身体を焼いた

気が付くとカレンのいた場所は

地獄の焦土と化していた…

10 地獄からの炎（後書き）

いきなり主人公を前にアリスの能力をさらしてしまいましたorz

しかし、次は多分NO. です!! ∴多分

あつ、感想等ありましたら、バンバンバシバシお書き下さいませ

ただし、作者の能力は多分今が限界ですΣ（。ロ。）

11 記憶（前書き）

今回は少しとんでいます（。ロ。

アリスとNo.の年齢が分かるかも（▽₁；）

11 記憶

「???」

あれ?ここ何処だっけ?

…そうか、私は今日神様に捧げられるんだ……

もう少し生きたかったな…

—この日の数年前—

『お父さん、お母さん!なんで?』

今、私の両親は張り付けにされている。

『お前の両親は神を冒涇したからだ』

後ろから神官様の声が聞こえた。

えっ?嘘?

『こやつらは神の誓いを破ったのだ!』

嘘よ…お父さんもお母さんも毎日お祈りして、
神殿にも通い、毎日
神様に感謝して暮らしていたもの…

『神官様、この2人が何をしたのですか?』

神官様は私をただ見つめていた。

そして、

『それは言えん。そして、お前はこの2人の罪を償う為、巫女として神殿で神に仕えるのだ!』

―この日の一週間前―

私は牢獄に閉じ込められた。

目隠しをされ、両手、両足を縛られた。食事の時は、這いつくばるようにして食べた。

カッ、カッ、カッ

この足音は神官様だ。

『おい、X X Xよ。今なら聞かせてやろう。何故、お前の両親が張り付けにされて殺されたのかを。聞きたいか?』

そう聞かれた瞬間、私は激しく首を振っていた。

『よかろう。まず、奴らは神を冒瀆などしておらん。』

つまり、本当の理由は別にあるの?

『あの年は凶作だったのを覚えているか?あの時、我らは最終手段をとることにしたのだ。神に生け贄を捧げると。』

…そう、それが両親だったのね…

『我々はある娘を生け贄に捧げると決めたのだが、その親が我々に懇願してきてな。我々は慈悲深くその願いを受け入れることにした。つまり、その娘の代わりに親が生け贄になるという願いを』

えっ

『それがお前の両親だ』

嘘…私のせいで…

私が両親を殺した…の？

『そして、一週間後お前も神の処へ行くのだ』

…???

私は張り付けにされた。あとは神官様の手で心臓をえぐり出され、捧げられるだけだ…

『何か言いたいことはないか？』

『ない…です』

良かった…私も両親のもとにようやく行ける。

あの世で、2人に謝らないとな…

その時、神官様が叫んだ

『これより儀式を始める。』

いいいよか…これで良かったんだ

でも…

もう少し生きたかったな…

次の瞬間、刃物が胸にふれた。

私は覚悟を決めた。

…

…

……………、あれ？

気が付くと、男の子がたっていた。

黒髪で黒い目をした少年が

そして、彼の手からは血が流れ、5メートル先の神官様の刃物を血で止めていた。

少年は言った。

『インチキ神様の前でこんなことするとは、オレに対する侮辱か？』

神官様は一瞬啞然としていたが、叫んだ。

『貴様、我が神を侮辱する気か？』

少年は笑った。

『神だと、何も知らないイカサマ師が笑わせる』

神官様はお怒りになった。そして、後ろの武僧たちに向かって叫んだ。

『お前ら、娘ごとアイツを射殺せ』

そういった瞬間、矢が放たれた。

…結局死ぬんだ。

何も変わるわけではないよね…

ところが彼の手から出ていた血が薄く広がり、矢が吸収された。

『なっ、何だと！？』

『五月蠅いんだよ。三流風情が』

少年は続けた。

『生け贄はお前だ』

そう彼が言った瞬間、彼の血は神官様を飲み込んだ。

そして、私の方を見て

『ついてこい、お前の知らない面白いものを見せてやる』

『本当？』

『ああ。お前名前は？』

『あるけど…この名前はもう使いたくない』

『なら、オレがつけてやる。お前は…』

アリスだ、そう言って少年は笑った。

11 記憶（後書き）

今回はアリスの過去編パート1でした。

ですが、このメンバーにはアリスも含めてまだまだ秘密があります

N.O. の能力はまだ一部しか出てません（。ロ。）。
また、血時雨も出てきませんでしたね

感想等お待ちしておりますので、暇だーという時にでも書いてくれると嬉しいです！！

ではノシ

あつ、次回は現代に戻ります（▽₁；）

12 理由（前書き）

今回はあんまり話が進みません（。ロ。エッ

12 理由

—アパート—

『気づいた!!』

『ふー、良かった。大丈夫か、アリス?』

アリスはキョトンとしている。状況がいまいち掴めてないみたいだ。

『えと…私夢見てたみたい』

アリスはボーとしている。完全に頭が働いていないみたいだ。

『どんな?』

何となく気になったオレは尋ねてみた。

『昔の。N O. かつこよかったよ♪』

そこで凜が割って入った。

『N O. の? どんな? いつの話?』

『初めて会ったときのだよ♪』

凜が激しく食らい付いている…

とその時、アリスがハツとする。どうやらようやく頭が働き始めたらしい。

『No. あの女は?』

オレは思っていることを言った。

『分からん。なんと言っても奴らだからな。まあ、あれで生きてたやつ見たことないけどな…』

そう、と彼女は言いながら、気になったというような感じで告げた。

『私ね、戦ってて思ったの、あれは【獄炎】じゃないって』

その言葉にジョーカーが素早く反応する

『どゆことや、嬢ちゃん?』

そう問われてアリスは少し考え、

『なんとなくだけど、偽物というかコピーみたいだったの。上手く言えないけど…』

『そっか。わかったわ。取り敢えずそこも探りいれんとな。』

―個室(No.と凜)―

気が付くと、もう日が落ちていた。

オレは何となく外に出たくなった。

『ちょっと外出てくる。』

オレはそう言って部屋を出た。
すると、凜は小走りで追いかけてきた。

『私も一緒にいっていい?』

『構わないけど。静かにしろよ。』

『うん。』

—30分後—

オレ達はビルの屋上にいた。

オレがそこで上を見ていたら、凜が聞いてきた。

『No. さ、何で夜空が好きなの?』

オレは答えた。

『オレと似ているから…かな。後、初めてのオレの仲間も好きだったからな』

『それって前に言ってた血時雨を作った人?』

『ああ、そして…』

一呼吸おいた。

『オレの大切な親友だ』

『うん。そういえば、私って貴方とはどういう関係になるかしら？』

オレは即答した。

『仲間で、姉』

『ここは彼女とか言ってよ。』

凜はむくれた顔で言った。

何故か何となく凜に話したくなった

『それにアイツはな、オレを多分最初に殴ったやつだった』

：何言ってるんだろうな、オレ

凜が反応しなかったら、このまま独り言で済ます気だったが、凜は聞いてきた。

『そうなんだ。何で殴られたの？』

『オレがこの世界なんていらなくて言ったんだ。オレは知らなかったけど、そいつはな、残り3日の命だった。けど、やつは本気で生きていた、そして、やつは3日後に死んだ。』

：アイツは0%でも諦めないやつだったな

そんなことを思い出していると

バコッ！

！？殴られた？

『今のは何発目？』

『おまっ』

『いいから答えてよ！』

『…2回目だ』

凜はガッツポーズをとりながら

『よし！』

オレはイライラしながら聞いた。

『何で殴ったんだ？』

『私を置いていこうとしたから』

凜は続けた。

『私に迷惑をかけたくないと思っていたなら、嬉しいけど』

でもね、と言うと

『私達はパートナーでしょ。そりゃ迷惑かけたりしちゃう時もあるよ。でも、それを助け合うものじゃないの？』

『私はね、いつもN O. の側にいるよ。守るって決めたから。』

『ああ。』

…そうだったな、オレもそう決めたんだった

『N O. は強いやつと闘うのが好きだっていうのも知ってる。』

『だから、一緒に闘いたい!』

…コイツで良かった…

『ああ、よろしくな、相棒!』

『うん!』

あと、といって凜は包みを取り出した。

『プレゼントだよ』

『開けてもいいか?』

『どうぞ』

開けると白い刀身の刀―長さは血時雨と日本刀の間ぐらい―が入っていた

『雪華^{せつか}だよ。』

血時雨を持つオレには分かる。この雪華って刀、間違えなく妖刀だ。

『これどうしたんだ？』

『昔、大切な人からもらったんだ。大切なものを守るために使えて』

『貰って…いいのか？』

凜の声は笑っていた。

『もちろんだよ。』

『じゃ、帰ろうか』

オレ達は帰り始めた。

12 理由（後書き）

武器紹介です。

雪華^{せつか}：凜からもらった白い妖刀。長さは血時雨と日本刀の中間くらい。凍りつくぐらいに冷たい。

でわ、次回ノシ

13 招待（前書き）

話が急展開します（＾Ｏ＾）

暖かい目で見守ってください m
〔 m

13 招待

―帰り道―

なんか嫌な予感がする…

そう思った瞬間、銃弾が目の前から飛んできた。

オレは咄嗟に右手を出し、右手の皮膚が破けた瞬間、血で弾を弾いた。

撃たれたことに気付いた凜が慌て駆け寄る。

『大丈夫、No.？』

『ああ、』

オレは返事をし、そして、暗闇を睨み付けて言い放った。

『誰だ？』

案の定、暗闇から人が出てきた。こいつは、

『忘れたのぉ？ カレンよ、カレン♪』

ちっやっぱり生きてたか…

『お前、あれ食らって生きてるとは。正直、驚いたな』

すると、カレンはニヤニヤしながら言った。

『あらゝあれで果てるような私じゃないわよ』

そこから、まあどうでもいいんだけどね、と続けた。

『空のやつから伝言よお。明後日、この国を終わらせてみせるだつて』

…なんだって？

『ちよつと、あなたそれということよ！』

思わず凜が叫ぶ

『私に言わないでえゝ、私はただ頼まれただけよ』

ダルそうにカレンが返事した

『それじゃあね♪』

『オレから逃げられると思っているのか？殺すぞ』

情報なんて、死んだ後に脳からオレの血で引きずり出せばいい話だ。

『あらゝ、残念ねえ』

そう言った瞬間、やつは燃え出した

『お前!!』

『じゃあね、カミサマ』

そう吐き捨てて…やつは消えた。

—アパート—

『なんやって!!』

ジョーカーは驚いた

『一体何をする気なんや？鎖にそんな化け物みたいな力があるとは思えんし』

やつにしては珍しくあり得ないという顔をしていた。

『恐らく残りのメンバーだろうな』

オレは思ったことを口に出した

『そんな能力があるんかいな？』

『いや、恐らく能力じゃないだろう』

その時、アリスが呟いた。

『爆弾…そうだよ、爆弾だ。』

なるほど…

『爆弾か。そいや私の耳に3日前、ここの最新鋭爆弾が盗まれたって入ってきたな。』

『性能は?』

『国の3分の1を吹き飛ばす。けど、どう考えても国を潰せるレベルやあらん。』

その時、オレの脳裏に昨日のニュースが蘇った…

『ダムだ。最近の降水で国最大のダムが決壊仕掛けてるらしい。』

『なるほど、確か名前は…ラインダムか、そこをやれば国としての機能がストップしてしまうな。』

ラインダム

―この国の3割の水源を保持した超巨大ダム。このダムには常に最新鋭の機械が導入されており、また、都市の水源確保を目的としているため、都市の近くに建築されている。

ここでツヴァイが疑問点をあげた。

『この国の経済は七割が輸出で成り立っていますからね。しかし、結果的に国を潰して何をするつもりでしょうか?』

『わからない。だか、いずれにしろやつを叩くチャンスだ』

ジョーカーはニヤニヤしていた。

『どうせなら祭り事はでかいほうがええもんな』

「???」

『来てくれるかな?』

『来るでしょ、ねっカレン♪』

『私にふらないでよぉ。取り敢えず役目は果たしたわよぉ』

『まあ、来ても来なくても面白いけどね』

『さて、ボクらも準備しようか』

13 招待（後書き）

一気に流れが変わりました。自分でも展開を急ぎ過ぎた感がありますが：敢えてスルーでw

近いうちに誰かの過去話を入れますね（＾Ｏ＾）

感想等お待ちしています。文章が変だとか、こうすればよいとかも気軽に書き下さい（＾＾ゞ

でわノシ

14 神速（前書き）

いよいよです。

少し頑張りました（^^ゞ

14 神速

—ラインダム—

ようやくついた、吐きそうだな…

『着いたね』

…こいつら、なんで車に20時間も乗って平気なんだ？その前も船、バス、、

『時間がない、走るで！』

オレ達は走り出した…

—ラインダム内部—

ハア—ハア—とオレは息を切らせていた。…多分、原因は車酔い…

『ようやく来たね』

少年の声がした。

『！？誰だ？』

この声は…

『忘れたのかい、空だよ』

…久しぶりだな

『悪いがお前はここで潰す』

オレは言い放った。

『せっかちなあ、まあ、いいけど♪』

やつは楽しそうだ。

『皆さん、ご察しの通りボクはここを爆発させます。だけど、それじゃつまらない。』

だから、と続けた

『ボクの仲間と勝負しないかい？勝ったら爆破はやめてあげるよ。』

ふん、なめてるのか？

『上等だ』

うんうんと空は楽しげに頷いた。

『ただし、一対一だ。そうだな、君でいいかな。』

と言うと空はツヴァイを指した。

『解りました。』

ツヴァイはあっさりと返事をした。

本当はオレも闘いたかったが、仕方がない

『物分かりがいいと楽だね。じゃあ、上で待ってるよ』

やつはそう言うのとエレベーターに飛び乗った。

『上がるぞ!』

オレは叫んだ。

―屋上―

屋上に空ともう一人立っていた。

『来たぞ』

『今回は彼が相手するよ。じゃね』

そう言うのとやつはダムへ飛び降りた。

ちっ、また逃げられた

残った1人は老人だった。一見普通の老人だが、何かが違う。

『さて、行こうかの』

いきなりそう言うのと老人はツヴァイに飛びかかってきた。

それに気付いたツヴァイは咄嗟に大剣デストロイを盾にする。

『わしは仁^{じん}じゃ。お主かのツヴァイとやらは？』

『そうですよ。失礼ですが、あなたただのご老人ではないみたいですね』

そうツヴァイは返事をしながら、仁をはね除ける。

と同時に吹っ飛ばされながら、仁は何かを投げた。

それをツヴァイはそのままデストロイを盾にして防ごうとしたが、

バァン！

という音と同時に防いだ部分が爆発した。

爆発の反動で剣こそ飛ばなかったが、バランスを大きく崩してしまっ

た。

その隙に仁は間合いを詰め、攻撃をしようとする。

だが、間合いを詰められる前にデストロイで真横を薙ぎ払った。

これを仁は軽くバックステップしてかわす

『やりますね、あなた』

『お主もの』

いきなり、仁はダムから飛んでくる飛沫に手をあてた。

驚くことに、その手には水で出来た剣が握られている。

『!？その力、道タオですか？』

『いかにも。これがわしの能力じゃ』

道か、厄介なやつだな…

『そして、わしの能力は水に特化しておる、本気でこんど死ぬぞ』

『それでは…本気でいきましょうか』

そう言った瞬間にツヴァイは両手で持っていた剣を左手に持ち変えた。

そして、姿が消えた…

気が付くと仁の後ろから切りかかっていた。

だが、仁も水剣で受け止める。

ツヴァイが一度離脱すると、剣が爆発した。

『くっ、水素爆発ですか』

厄介な相手、今やつの武器はこの土地そのものだ。もしかしたら、ダムの水使って大爆発をおこすかも知れない。

『まあ、剣の水滴だからたいしたことないがな。本当はわしがダムを破壊する予定だったが、空坊主のわがままでの。まあ、わしは約束事は守るから安心せい』

『それは有り難いことで。ですが…』

ツヴァイは構え直した

『なんじゃ？』

楽しげに老人が聞く

『もう終わりです。』

そう言った瞬間、ツヴァイは仁の目の前にいた。そして、大振りに剣を振った。

それを仁は軽々とよけ、嘲るように笑った。

『なんじゃ、その程度でわしをとった気になったのか？』

バン！

『カハッ、…なんじゃと？』

仁は訳がわからんという顔をしながら、地面に倒れ込んだ

ツヴァイは剣をおろした。

すると剣の後ろ側に右手で持っていたのは…銃だった。

『引っ掛かりましたね。私が剣以外何も武器はないと。そして、隠し玉は神速しかない、とね。』

『貴様：最初から!？』

『ええ、切り札は最後までとっておくものですから』

それを聞いて、仁はニタと笑った。

『なかなか、ええ相手と会えたわい。今回はお前さんの勝ちじゃ』

そして、じゃあの、というと仁の姿は水に変わった。

14 神速（後書き）

どうだったでしょうか？

個人的には初期案よりまともにできたので、満足です W

次は過去編です。お楽しみに（^O^）

15 道化―イチバンメー（前書き）

今回は予告通り、過去編です。

ジョーカーが神眼を手にした理由がわかる！かも

15 道化―イチバンメー

―どこかのサーカス―

『レディース&p;ジェントルマン、今宵は魑魅魍魎の世界へようこそ。』

その声がしたのと同時に道化師の仮面と言うかマスクを着けた男が照らされた。

『我の名前はジョーカーと言いますねん。以後、お見知りおきを。』

『今宵の曲芸の数々はこれから皆さんが見てきたものとは、一味も二味も違うものばかりでございます。』

そう言いながら、ジョーカーはおもむろにポケットからこれでもかというほど玉を取りだし、ジャグリングを始めた。

最初はゆっくりだったが、段々とスピードを上げていく。

そして次の瞬間、玉を空中に跳ねさせた。

その後、指を鳴らすと落ちてきたのは玉ではなく、真っ赤なバラの花束。

これを見た観客は一気に興奮し、ジョーカーにありったけの拍手を送った。

ジョーカーはそれに対して一礼した。

『それではこの魑魅魍魎の世界をどうぞ御堪能あれ。』

―サーカス公演終了後―

『アニキ、団長がよんでいます。早急に、だとのことですよ。』

ロン―十歳で得意技はナイフ投げ―が声をかけてきた。

またか、まあ、しゃーないけどな…

我は笑いながら言った。

『ありがとな、ロン。わかった。』

けど、まだロンは何か言いたげだった。

『なんや？まだなんかあるんか、ロン？』

すると、ロンは真っ赤になった。

『あの…アニキ、またナイフ投げ見てくれませんか？』

『なんや、そんなことかいな。我が暇な時はいつでも見たる。』

すると、ロンは下をむいて

『あ、ありがとうございます、アニキ！それじゃ、僕練習するので』

…ちっこい頃から見てきたけど、相変わらず練習熱心やな。

『おう、そうか、頑張り。』

『はい!』

大きな頼もしい声が聞こえた。

『あつ、あと…』

『な、何ですか?』

『お前投げるとき肩に力が入りすぎとるから、とりあえずそこ注意して練習し。』

すると、ロンは頭を深く下げた。

『解りました。ありがとうございます!!』

『じゃあ、またこんどな』

我はロンに手を振った。

―団長のテント―

……

……

……

えっ、なんやて？ そんなバカな真似を？

『それ正気で言ってますか？』

『今までさんざんやって来たお前が言うか？』

そんなこと、するためにオレは…

『決行は明後日。ミスは絶対に許さん。』

『…解りました。』

あれ？ 我何をぼざいているんだろうか？

こんなことを……

15 道化―イチバンメ―（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は長い過去編になりそうです。長い目で見守ってください（^ハ_ッ）

また、感想等お待ちしています（^ハ―^ハ）

16 道化―ニバンメ―(前書き)

前回の続きです。

16 道化―ニバンメ―

―とある倉庫―

バン！バン！

今、私の目の前には一人の女が血を流して倒れている。

『な、なんで、あ…んたが…わたしを』

ハアハアと息を切らしながら女がしゃべりかけてくる。

だが、私は足で女を踏みつけた。

女は耐えれず悲鳴をあげた。

そして、私は銃を片手に

『義務やからや。恨むなら恨んでくれてかまわへん。』

バン！

満天の空に命を刈る音が響いた…

―翌朝のサーカス公演後―

『ええか、投げるときはこうや。手首で投げるんやない、体全体を使って投げるんや。』

『はい！』

ロンはそう返事をし、ナイフを投げた。すると、ロンの投げたナイフは見事練習用的に刺さる。

『やるやないか。』

我が誉めると、ロンは顔を真っ赤にした。

『アニキのおかげです。ありがとうございます。』

『気にすんなや、仲間やろ。さて、我はもう行くわ。ロンもはよ寝や。』

そう言うのと、我は逆方向へ歩き出した。

『はい。後少しやってから寝ます。それじゃ、アニキお休みなさい。』

後ろからの声に我は手をあげて応えた。

『ああ、オヤスミ、ロン。』

そして、歩きながら自分を心の中で笑った。

仲間、そんなことを言う資格はないハズなのにな。

―団長のテント―

我の報告を聞いた団長は満足げな顔をした。

『よくやった、ジョーカー。それにしても、やつが生きてたとはな…』

『今回は自分が殺しましたゆえに、生きていることは無いかと。』

その返事に団長は上機嫌で反応した。

『わかった、下がってよいぞ』

自分の言葉一つ一つに吐き気がする。

そして、人殺しをすることに躊躇いを全く感じない自分自身がひどく滑稽に見えた。

16 道化―ニバンメ―(後書き)

意外と長くなりました。

今回は短めでした(。ロ。)

理由は上手く区切れないからw

では、こんなバカ作者を今後もよろしくです(ゝーゝ)

17 道化―サンバンメ―(前書き)

長くなりそうな予感!?!がします(ー、ー)
b

17 道化―サンバンメ―

―ジョーカーの部屋―

部屋は驚くほどに何もない。ただ、ベッドとクローゼットがあるだけだ。

我は部屋のロウソクに火をつけた。その瞬間、部屋がほのかに明るくなる。

その明るさとは裏腹にどんどん心は暗くなる。原因はこの前殺した女と『仲間』という言葉…

「仲間…か。」

ふと自分の口から言葉が漏れた。つくづく自分に似合わない言葉だと思う。

自分に似合うのは、そうだな…

「『裏切者』か…」

そう呟いた自分がおかしくて笑ってしまった。

―翌朝―

「アニキ、おはようございます」

朝飯を食べるために向かった食堂の途中で、ロンに話し掛けられた。何だかウキウキしているようだ。

「おはよ、ロン。なんやえらい嬉しそうやな。」

「ええ。あの：アニキ今から少しだけ付き合ってもらえませんか？
見せたいものがあるんです。」

「ええよ。ほな行こか。」

我はロンについていった。

―練習場―

「短い間に上手くできるよーなったな」

「えへへ、アニキのおかげです」

連れて来られたのは、練習場。どうやらこの前教えたことは出来るようになったらしい。

「ほな、今日はナイフを二本使う技を教えたる」

「本当ですか、アニキ！ありがとうございます！！」

この後、しばらく指導を続けた。

―夜、団長のテント―

「マジですか？あの組織はこの前自分が潰したハズですが…」

「別の誰かが組織の施設だけを使用しているらしい。出られるか？」

「……行きます。」

―先日の倉庫―

中は真っ暗だった。我は周りを見渡したが、普通状態の眼には何も見えない。その時、声がした。

「待ってた、ジョーカー」

「!? 誰や?」

その時、照明がついた。目の前には、黒髪、黒目の男。年はまだ学生くらいだろう。

我はそいつに話し掛けた。

「驚いたな、よりによってこんなやつ1人かい。ごっつい男が何人もいるかとおもったわ。」

「そんなことはどうでもいい。」

「あらー、つれへんな。それで：ボク、ここで何しとる?」

「イカれた道化師を、いや、『神眼』を仲間にしようと思ってな。」

「おもしろいこと言うな、ボク。けどな、そん前にボクを我は殺してやらんといかん。我に勝ったら、仲間になってやってもいいけどな。」

17 道化―サンバンメー（後書き）

作者が部活で忙しかったため、更新できませんでした。

あと、そう言えば書き方かえてみました。

しばらくしたら、一話からこの書き方にかえるつもりです（ハハッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0614i/>

アナザー

2010年10月11日15時38分発行